

ドキュメント
現代の教育

9



高杉晋吾

●エリート教育の内側をえぐる

受験校つくられる神童たち

学陽書房

ドキュメント現代の教育9

受験校 つくられる神童たち

定価 九八〇円



昭和五四年六月二五日 初版印刷
昭和五四年七月五日 初版発行

◎著者——高杉晋吾

発行者——小林泰輔

発行所——学陽書房

東京都千代田区富士見一七―五
〒一〇二 振替東京七―八四二四〇
TEL (二六二) 一一二一(代表)

印刷所——亨有堂

製本所——川島製本所

・乱丁落丁本はお取替いたします。

0337-37329-1028

高杉晋吾 ● エリート教育の内側をえぐる

受験校 つくられる 神童たち

学陽書房

はしがき

受験校ってなんだ？ それは子どもの体や、考え方や、神経や、生理にどんな影響を及ぼすものなんだ？ 子どもの生き方にとってどんな意義をもたらすものなんだ？

エリート高校って何だ？ ということを書き下ろしで……と学陽書房の星野智恵子さんが言ってきたとき、僕は正直言って「こりゃ、えらい難題を吹っかけられたものだ」と内心困惑した。だが、事態は少年少女の自殺、非行の激増とともに、エリート少年らによるショックキングな事件、家庭内乱暴の末に父親に殺されたり、「低能な大衆」を呪い、祖母を凶刃にかけた末に自殺をする事件、などなどが激発する始末である。これらの事態が、新聞では「受験体制の重圧」という切り紙細工のような訳知り顔のパターンで調理されて出されて来る。

「こりゃ少々まずい。どう考えてもそれだけではない」「深み」のところを出さなければ、新聞の読者だって納得すまい」

私は、そう考え、開成高校事件に触発されて、東大合格率トップ高校のエリート生徒たちに会い、教師にも会いながら、現在起こっている様々な事件の発生する根のところに光を当て、そのことから、もう一度、受験高校・エリート高校とは何か、という最初の疑問に私なりの認

識を深めてみようと思った。

取材してみると、やはり、息子や娘を持つ父母の一人として考えざるを得ない問題が、それらの事件と、それをおしてみたエリート高校の内側には、無数に存在することが判る。しかし、私は、それらの「無数」に手を拡げるのではなく、事件（自殺・殺人・非行等）を通じてその周辺に浮き上って来る父母、生徒、教師の像に焦点を当て、そこから、開成、教駒、麻布等の学校像が浮かび上って来る方法を選んだ。

しかし、誰だってそうだ、と思うのだが、今の世の中、視野狭小的に、自分や父母が希望する高校や大学にだけ視点をすえようと思っても、現代を貫ぬく教育制度全体に眼を向けなければ、受験という活動自体が一步も前進しないしくみになっている以上、私もまた徹視的な事件と当事者を貫いて学校全体を、そしてやがて巨視的に教育総体と社会を、というように全体構造のしくみにまで視点を及ぼさざるを得なかった。

一章では、自殺事件をめぐる教育大附属（現・筑波大附属）駒場高校を、二章では、殺人事件をめぐる開成高校を、三章では、ヤジ事件をめぐる麻布学園をとり上げ、各章でも事件をおして論及し得る限りの私なりの総括を提示したが、これらの各校を取材し終えた上での認識と問題点、そして教育構造の整理を行なってこれを四章とした。

腰の重かった私が、怠け者で短気な性分にもかかわらず、私としては異例の長期取材をこの一冊に貫くことができたのは、青春の渦の中で、生の体験を私に語ってくれた多くの高校生、教師の協力と、学陽書房の星野智恵子さんの粘りと示唆のおかげです。

一九七九年五月一日

高杉 晋 吾

もくじ＊受験校つくられる神童たち

序章●受験校ってなんだ 9

第1章●神童たちの孤独 筑波大学附属駒場高校 17

教駒二五期生の不思議 19

本当のことを言おうか 21

東大一直線 32

抽選制の部分的採用 43

小口君はなぜ死んだか 55

ほくの内面の鈍感さ 70

そんな授業じゃ大学受かんないよ 83

いじめられっ子・ヤジ・茶化し 98

第2章 ● 英才教育のはざままで 開成高等学校 113

教育への和讃 115

過密の低湿地帯にて 122

むこたらしくも生を享け 130

階層地獄の中から 137

英才教育の死角の沼で 143

エリート教育の終焉へ 152

親の権威というものについて 156

第3章 ● 進歩的教育か柔管理構造か 麻布高等学校 167

くやしかったら東大に入ってみろ 169

虚構の連帯感 175

僕たちが落ちこぼれなんだ 180

名門校の貧しさ 184

勉強しないと体に悪くてね 189

教師たちの原点 193

「打倒灘」か「実力テスト廃止」か 200

第4章 ● 泥色の大河を停めよ 211

資料編

小学生の受験生活に関するアンケート 222

高校における進学指導実態調査 233

全国有名受験校一六校の進学指導の実態 237

* カバー写真は七九年度東大入試合格発表風景。共同通信社提供。

* 各章の扉カットは、開成高校で使われているサブテキストである。

序章 ● 受験校ってなんだ



●教育投機フイバー

現在、わが子を小・中学にやっているお父さんやお母さんたち（それは私を含めてそうなのだが）にとって、わが子の高校の選択の問題というのは、一九六〇年代以前と以後とは、その関心の向け方の度合いと情報の集中度、関心を向ける層の拡がり、厚みが全く違っているのではないだろうか？ 私は、本書で取り上げるエリート高校（東京御三家）の取材をしながら、麻布高校の教師がこう言ったのが印象に残っている。

「オイルショック以降、トイレットペーパー買占めに殺死したお母さんたちが、ほとんどそれと同じような形で名門エリートコースの買占めをはかった、という感じが強い」「現在では、お父さんが買占めに殺到している」と。

一方、これは、直接この本とは関係のない取材の中で、埼玉のある工業高校の教師が、
「自分の意に沿わぬ学校から、子どもたちが必死に逃亡しようとして、犯罪をやったり、自閉症のまねをしたり、わざとシンナーを吸ったりする例はいくらでもありますよ」
と言ったことも、私の頭に灼きついている。

これは、埼玉県西部の首都近郊都市、所沢のある高校生が、その高校をやめたいばかりに銀行強盗を働いた、という一九七九年二月六日に起こった事件の取材であった。

その教師は、「それが高校進学率九七・四パーセント（埼玉）のもとでの実態です」と言った。九〇パーセントを越えたのは一九七五年ごろであっただろうか？ その年の三月、全国の中学校から高

校へ進学した生徒は九一・九パーセントとなり、一九七八年三月には九三・五パーセントとなった。

その教師は言った。

「進学率が五〇～六〇パーセントのころは、まだ生徒たちに気力があつた。別に大学進学率の高い学校でなくても、入ったことに誇りを持っている子が多かった。今は、学校に行くより働きたい、という子を、親が体面上、高校に入れなきゃ恥ずかしいと言って、むりやり九七・四パーセントにしまつた」と。

私はこの本で、別にむりやり高校に入れたがる親を責めて、その「体面」や「虚栄」に対してお説教を加えよう、などというつもりはまったくない。しかし、何が何んでも高校へ、という意識と、世間的な評価（一流大学進学率）の高い高校へという意識は、ひとつながりにつながっており、むしろ後者の土台の上に前者が、「親亀の背中の子亀」のごとく乗っかっていることはまちがいない。

つまり、今や時代は「孟母」、いや「一億総孟親」の時代であり、よい学校を求めて家を遷しまわつた「孟母」の故事にならって「孟親三遷」や「多遷」をやる教育フーパーの時代に私たちは住んでいる。

オイルショックの時のトイレットペーパーや洗剤買占め騒動のような、少なくとも現象的には一時的な（実はより構造的な危機の一時的な露呈と言うべきだが）ものとは違って、自分の老後とわが子や孫の生涯の安楽にまでつながる事業として教育を見るならば、教育への投資こそ何よりもナウな、一家をフーパーさせずにはおかぬ投機課題であるには違いないのである。

これが、私の最近の「教育」における時代認識の核心である。

●エリートたちに何が起こっているか

さて、そうした一流大学をめざす競争から脱落させられた子らが荒れ、教育が荒廃する、というのが、高度成長下における教育の多様化路線の時期の私の基本認識であった。

しかし、周知のように、最近の「激しい」というも愚かな自殺、非行、暴力等の事件の連続を見るなら、もはやそうした認識は、とうの昔に陳腐化したものでしかないことは明らかだ。

もちろん、その認識は誤っていたのではなく、現在も正しいにはちがいないのだが、少なくとも現在、子どもたちに起こっているような現象をとらえるには、その認識のワクを取り払って、そもそも切り捨てられる側だけではなく、切り捨てる側Ⅱ競走の勝者の内面をえぐらねばならないだろう。

『週刊朝日』編集部調査によれば、一九七九年三月一九日、東大合格者高校別順位は、

- ・一位 開成（東京） 一二一名
- ・二位 灘（兵庫） 一一四名
- ・三位 筑波大附属駒場（東京） 一〇二名
- ・三位 東京学芸大附属（東京） 一〇二名
- ・五位 麻布（東京） 九六名
- ・五位 ラサール（鹿児島） 九六名

と五位までに六校が並んでしるぎを削っているのだ、と言う。

昨年の順位は、灘、東京教育大（現・筑波大）附属駒場、開成の順だったという。

私は正直言つて、このエリート高校の東大頂点主義の受験戦争に、従来、まったく言つてよいほど興味がなかった。

私が教育問題について書いたドキュメントは、これまで『教育棄民』（ダイヤモンド社刊）、『部落差別と八鹿高校』（三一書房刊）、『教育差別からの解放』（同）などであり、その後、教育の選別と善の体制の中から、子どもたちが次から次へと自らの命を絶つてゆく姿を追いつづけていた。

だが、切り捨てられる子らの死だけが、いわゆる「少年少女・幼年自殺」の問題ではないことは明らかだ。「エリート」という訳のわからぬ俗語を冠せられて死に急ぐ子らも多い。非行も、登校拒否も、家庭内暴力も、切り捨てられる子らに劣らず「エリート」校内にびまんしている。

たしかに、棄民の側が、選別されることよつて自分の一生を、社会的に低い位置づけの中で、経済的に貧しく暮らさねばならぬ、という「不条理」な重苦しさを、幼いながらも重くきびしく荷わされ、その結果死に追いつめられるのは、納得もし、そのような差別と選別の体制への怒りも、胸の中にボツと点火される。

それに対し、いったい「位人臣を極める」方向に一步踏み出した選民の子弟たちが、なにをいまさう……と苦々しい思いさえないではなかった。

しかし、やはり本書第二章で取り上げる例の開成高校の佐藤健一君の死は、登校拒否―家庭内暴力―殺人―家庭のどん底からの崩壊という凄まじい結果をもたらし、私たちに衝撃を与えた。

私は、いったいこの事件は、エリート高校生や中学生たちにとって、普遍性を持っているものなのか、それともまったく例外的に起こったことにしかすぎないのか、とにかく見てみたいと思った。

少なくとも彼の死を通じて、従来「私の東大合格の秘訣」といったたぐいの関心の対象でしか見られなかった「受験校」の生徒の陽面の部分に対して、廃棄されたビルのコンクリートが風化し砂となつてザラザラとこぼれるような陰面の部分が、意外にエリート校生徒の中で腐蝕し、拡大しているのではないかと。

今年の一月一四日、早稲田高等学院の生徒が、祖母を殺して自殺した。

同月半ば、例年東大受験で多数の合格者を出している東京の六年一貫教育の私立高三年の生徒が、成績が下がり、登校拒否―家庭内暴力で入院中に、看護婦を果物ナイフで刺すという事件が発生した。

私は、これらの事件の主人公の少年たちに渦まいているものは、先述した「学校をやめたくて銀行強盗をした高校生」の、教育そのもの（学校・家庭・社会）からの「脱走願望」と相通ずるものがあるように思えてくる。

毎年、東大合格者順位のトップクラスにくつわを並べ、東京御三家と称されている私立・開成高校、私立・麻布高校、国立・筑波大附属駒場高校――この三校の取材をとおして、名門受験校の実態とそこに学ぶ生徒たちの素顔を追求してみた。

その三校は、灘、ラ・サールとともに、日本の代表的な受験校であり、何かにつけて、注目の的になっていく。マスコミは、「受験校」「東大に大量に合格者を出す有名校」として注目し、主にその側面からのみこれらの高校を事あるごとに取り上げている。開成で父親による息子殺しの事件が起こ